

囚われ人

——寓話——

豊島与志雄

青空文庫

或るコンクリー建築の四階の室。室内装飾は何もないが、ただ、大きな電灯の円笠が天井からぶらさがっていて、室中に明るみを湛えている。片側だけ窓で、窓の外は闇夜。全体が箱の中のような感じ。室の一方に、巨大な円卓があつて、その端寄りに数人の男女が集まつている。彼等と向い合つて、室の他方に、四角な小卓があり、正夫が坐つている。正夫はたいてい卓上に顔を伏せていて、ごく稀にしか顔を挙げない。

——この一篇、単に寓話であつて、戯曲ではないから、人物の言語動作、唐突なことで多く、謂わば人形芝居めいた雰囲気。その上、正夫に対して大円卓の正面に坐つて一人の男だけが、通常の人間の恰好で、その周囲にいる男女たちは、なんだか畸形的なグロテスクな様子。どんなことになつてゆくのか、私（筆者）にも見当はつかない。というのは、この箱のような室内の一隅に、私はたまたま居合せていたに過ぎないからである。長い沈黙。正夫、立ち上つて伸びをし、また腰を下して、卓上に顔を伏せる。円卓の正面の男、議一が声をかける。

議一——正夫君、退屈してるようだね。退屈は人生の最大の悪だ。そういう言葉を覚えてるだろうね。だが、まあいいや。君には、この前逢つた時から、其後、一度も逢わな

ったね。この前逢った時から其後一度も逢わなかったというのは、変な言い方だが、僕の実感としては真実なんだ。ずいぶん久し振りだった。変りはないかね。僕も……いや僕たちと言おう。文化会議の仲間で、ここにいるのは僕一人だが、一同を代表して言うよ。そこで、僕たちも、相変らずだ。但し、相変らずということが、停滞を意味するならば、相変らずではないと言い直さなければならない。会合毎に、一步一步前進してるからね。

——ところで、今日の会合で面白いことがあった。君も知ってる通り、僕たちの文化会議は、文化の在りかたを検討するのが主眼であって、政治問題には触れないことになっている。然るに、昨今の政治の状態は、その反動的な攻勢といい、逆コースの方向といい、もう黙ってはおられないところまで来ている。つまり、吾々の方では政治問題に触れまいとしても、政治の方から吾々の身辺に迫って来ているんだ。そういう議論が一同の間に出た。そこで、その原因は何かということになった。一口に言えば、険悪な国際情勢から来る圧力、その圧力を受けてる国家権力の歪曲、その歪曲から生れるさまざまな弾圧的立法……これはもう立派なファシズムだ。徒らに左翼と右翼との抗争のみが激化し、基本人権は侵害され、自由と平和は脅威を受ける。このまま放置しておいてよいかどうか。歪曲された国家権力に対して、何等かの抗議を提出すべきではないか。だいたいそういう結論だ

つたが、当面の實際運動については、次の会合で話し合うことになった。

——これだけ言えば、正夫君、君の胸に応えるものがある筈だ。以前、君がしばしば提出していた意見と全く同じだからね。其後どうしたとか、君は殆んど会合に出て来なくなつたし、たまに出て来ても、殆んど口を利かなくなつた。だから、今日の会合で、会議のあとの雑談の折に、僕たちが君のことを思い出したとしても、不思議ではあるまい。誰からともなく、君の噂が出た。君がやつてるあのちつぽけな旬刊新聞、「黎明」の話も出た。あれはたしか、少数の読者を相手にした文化啓蒙のパンフレットの筈だが、それが近来、頗る政治色を帯びて来た、という説もあつた。どこからか秘密な資金が出るのだろう、という説もあつた。評判は香ばしくなかつた。そこで、正夫君、僕は、いや僕たちは、君にはつきり聞きたいんだ。君が金銭のために身を売つたかどうか、それが聞きたいんだ。まあそこまで言わなくても、少くとも、文化会議に君が背を向けることは事実らしい。そこで、こちらに背を向けることは、あちらに顔を向けることだ。人間は、両方に二つ顔を持つてはいないからね。いったい、君の顔は何に向いてるんだ。

正夫はふと顔を挙げる。眉根をしかめて、かすかな苦笑を浮べている。彫りの深い容貌なので、その苦笑が不敵だとも言える印象を与える。彼はちらと議一の方を見やつ

ただけで、また顔を伏せ、卓上に肱をついた両手の拳で頬を支え、眼は卓上に落したまま、口を利く。

正夫——僕の顔は地面の方を向いてる。僕の眼は足元の方を向いてる。もう暫く、僕はそうしていたいんだ。

議一はふいに立ち上って、正夫をじつと見つめ、それからまた腰を下す。

議一——それは君の今の姿勢だろう。そんなことを聞いているんじゃない。僕たちが聞いているのは、君の心の在りかた、精神の持ちかたのことだ。

正夫——僕は、体の姿勢と精神の在りかたとを、別物だと考えてはいない。もう暫く、僕をこのまま放つといてくれ。

議一——宜しい、君がそう言うなら、干渉はしない。然し……。

沈黙。

議一——さつき、僕たちは少し言い過ぎだったかも知れない。僕たちは君のことをやり仲間だと思っているんだ。日本人の悪い癖で、些細なことからすぐに、右の陣営だの左の陣営だの、敵だの味方だのと、符牒を貼りたがる、そういう通弊に陥りたくはないのだ。然しました、甘っぼい感傷や未練のために、思い違いをしたくもないのだ。

——例えば、映画を観る若い娘の話を持ち出してもいい。Nというスター俳優のファンだとする。右側の席にいた娘は、Nはこちらを向くといつも私の方を見ていたと、嬉しそうに言う。左側の席にいた娘も、Nはこちらを向くといつも私の方を見ていたと、嬉しそうに言う。中央の席にいた娘も、やはり同じことを言う。一階の席でも二階の席でも、同じことだ。映画とはそうしたもので、Nの眼は凡ての人を見てるので、つまり誰をも見えないことになる。そういう画面の俳優のようであつてほしくないと、君に僕たちは希望する。ここに眼のことを言うのは比喻であつて、実は顔のことだ。君の顔がどつちに向いてるか、それが問題なんだ。

——顔を地面に向け、眼を足元に注ぐ、それは君の自由で僕たちはとやかく言いたくない。体の姿勢と精神の在りかたとは別物でないと君は言うが、それも一応は承認しておく。然し、そういう体の姿勢、そういう精神の在りかたが、君がやはり僕たちの仲間だとすると、実は心配になるんだ。それは取りも直さず、病気が衰弱の兆候だからね。もう暫くこうしていたいとは、いったい何事だ。自滅を待つばかりじゃないか。

議一は激しく卓を叩く。正夫はちらと顔を挙げるが、また顔を伏せて、静かに言う。

正夫——僕は無理に死のうとは思わないし、それと同じ程度に、無理に生きようとも思

わない。

議一——ばかな。万事無抵抗主義で、万事成り行きに任せるといふのか。そんなら君の、あの積極的な、反暴力思想、反権力思想は、どこへ行つたんだ。病気が衰弱か知らないが、へんに投げやりなところが君には見える。どうしてそうなつたんだ。何が君をそうさせたんだ。投げやりの気持ちは、自暴自棄よりも一層悪い。自暴自棄には少くとも、何物かに対する一種の抵抗がある。投げやりには何も無い。頽廃ほどの感慨さえない。君のうちにはなにか、深淵みたいなもの、空洞みたいものがある。

——それで分つたよ。君が文化会議に殆んど出て来なくなつた理由も、その他の会合にも殆んど出席しなくなつた理由も、よく分つた。君はどこにも殆んど顔出ししなくなつたばかりか、誰に逢つても、ただにやりと気味悪く頬笑むだけで、殆んど話らしい話もしないというじゃないか。勿論、口を利きたくない時は利かなくてもいいが、君の様子はちつと変槿だと、皆が言っている。然しもう、とやかく言うのは止そう。まあせいぜい、顔を地面に向けて、僕たちに背を向けるのもよからう。眼を足元に注いで、青空を見ないのもよからう。そして君のうちにあるその深淵に、その空洞に、君自身すつぽりと呑み込まれるのもよからう。

——おい、正夫君、僕たちにばかり饒舌らせないで、何とか言ってみたらどうだい。そのくせ、自分では退屈してるじゃないか。いったい、君は一日中何をしてるんだ。退屈ばかりしてるのか。時間をどんな風につぶしてるんだ。何とか言ってみないか。

議一は拳固でやたらに卓を叩きつける。正夫はじつと頬杖をついたままにいる。議一はなお卓を叩き続ける。

間。

議一の腕を、横合から一本の手が押え止める。そして手の主は、すつくと立ち上る。胴体が短く、足が長く、極端に痩せ細った男で、体にきっちり合った服を着てるので、火箸のようにひよろ長く見える。彼は突つ立ったまま、室内を睥睨するように見廻し、正夫に眼を止めて、右手を差し伸べ、更に人差し指を一本差し伸べて、正夫を指し示す。時彦——俺は時彦という者だが、この人をよく知っている。煩いから騒ぐのは止しなさい。この人は決して退屈なんかしてない。退屈したことなんか決してない。ただ、俺を軽蔑してるだけだ。言い換えれば、俺を無視してるだけだ。

——この人は恐ろしく懶け者だ。ただそれだけだ。だから、懶け者の癖として、決して退屈することはない。何もすることがなくても、退屈しないし、何もしないでいても、

退屈しないし、どんなに忙しくても、退屈しない。恵れた性格さ。ね、そうだろう、正夫君。

正夫君と呼びかけて、時彦は初めて差し伸べた右手を下し、両手の甲を腰に当てがい、真直に突つ立つたまま口を利く。

時彦——いつだったか、面白いことがあったね。君は宿酔の体を日向に投げ出して、絵本を見ていた。開かれてる頁は、兎と亀の馳けっこの話の、兎が途中で昼寝をしてる、あのところだった。いつまでも君がそれを眺めてるし、しかも嬉しそうに眺めてるので、俺は不思議に思つて、何をそんなに感心しているのかと、尋ねてみた。すると、この兎の昼寝は実にいいと、君は答えたね。あの昔話を、君が知らない筈はない。そしてそれに含まれてる教訓を、知らない筈はない。俺はその点を実つ込んでみた。ところが君は、そのよきな教訓など、頭からばかにしてかかかっていて、ただ、競争の最中に昼寝した兎の無頓着さ、時間を無視した兎の無邪気さだけを、しきりに楽しんでた。そこで、俺とちよつと議論になつて、兎ならそれでも宜しいが、人生ではそうはいかないぞと、言つてやると、君が何と答えたか覚えてるか。兎にしても人生にしても同じことで、自信のある者は何事にもこせこせしないのだと、君は答えた。俺に言わせれば、そういう自信は、懶け者の

自信に過ぎない。

——まったく、君は懶け者で、そして自信家だ。両方がうまく合体して、時間を無視することになる。その結果、如何なる場合にも決して退屈することなんかはない。分ったかね。正夫は顔を挙げて、不思議そうに時彦を眺める。それからまた、卓上に頬杖をついて、顔を伏せる。

正夫——君は誰のことを言ってるんだい。

時彦——これは驚いたね。君のことを言ってるんじゃないか。

正夫——少しは当つてるところもあるようだが、実は、だいぶ見当違いだ。

時彦——また議論をするつもりか。そんなら言つてやろうか。君のずぼらな行動は、すべて、時間を無視するところから起るんだ。退屈はしない代りに、顔を上に挙げ、眼を上挙げて、真直に歩くことが出来ないんだ。それが分つていながら、わざと白ぼくれている。そんなのは、卑怯というものだ。そら、また一つ肩書が殖えたぞ、卑怯者とね。

——然し、君が如何に卑怯者で自信家で懶け者であり、そしてこの俺を無視しようとしても、そうはいかないぞ。結局は、俺の一步一步に、時間の一秒一秒に、ついて来なければならぬ。決定的な鉄鎖でつながれているんだ。いくらじたばたしよう、いくら蹴こ

うと、どうにもならないぞ。

——だから、いっそのこと、俺に従順になつてはどうだ。そつぽ向かないで、俺の方をじつと見るがいい。ずいぶんと可愛がつてやるよ。そしたら君は、昂然と頭をもたげて歩けるだろう。如何なる場合にも自由に口が利けるだろう。さあどうだ、俺に素直について来い。そつぽ向かないで、俺の方にだけ眼を向けろよ。

時彦は正夫の注意を惹こうとするかのように、卓をことごと叩く。だが正夫は、顔を伏せたきりで、前よりも一層項垂れて、額を両の掌でかかえている。時彦のそばから、女が一人立ち上る。赤い服装。体も四肢もへんにくねくねして、骨の代りにぜんまいでもはいつてるように見える。

愛子——愛子にも言い分があるわ。あんた一人で正夫さんを独占しようとしても、そうはいきませんよ。ねえ、正夫さん。

正夫は顔を挙げて、不思議そうに愛子を眺め、そしてまたすぐに顔を伏せてしまう。

愛子は正夫の方に片腕を差し伸べ、人差し指と中指とを二本差し出し、その手をふらふらと打ち振る。

愛子——正夫さん、正夫さん……愛子の方を見てごらんなさい。そつぽ向くもんじゃな

いわ。

愛子は突然笑いだして、腕を引つこめ、両手を腰にあてがい、時彦と同じような姿勢を取る。ただ、時彦は棒みたいに突つ立っているが、愛子は始終、体をくねくねと動かす。

愛子——正夫さん、時彦なんかに騙されちやだめよ。あんたはすぐ人に騙されるたちだからね。騙されるなら、あたしに騙されなさい。だって、あんたは愛子が好きでしょう。いつも愛子、愛子って、あたしのそばにつきつきりじゃないの。あたしが外に出かけて、帰りが少し遅くなると、あんたはごろりと寝ころんでいて、声をかけても、すねたように返事をしない。そのくせ、眼には一杯涙ぐんでるわね。愛子がいなのが淋しかったんでしよう。その涙を見ると、あたしほんとに済まなかったと思うわ。外に出ても、あんたがどうしてるか気にかかつて、おちおち用も達せやしない。

——夜寝ても、あんたはいつも、愛子の顔を自分の方に向けさせるわね。あちら向きになると、頸筋をくすぐって、こちら向きにならせる。そして、あたしの額にあんたの額を、あたしの鼻にあんたの鼻を、こすりつけてくる。ちっちゃな子供みたいね。そのくせ、あんたはほんとに眼ざとい。あたしがちよつと身動きすると、あんたはぱつちり眼を開いて、

あたしの顔を見てるでしょう。いったい、あんたはほんとに眠ることがあるのかしらと、不思議に思うことがあるわ。一緒に布団に寝るのがいけないのかも知れないわね。

——それでいて、あたしなんだか、気持ちがちつとりと落着かないの。あんたが愛子をほんとに好きだつてことは、そりやあ分つてるわ。分つてるけれど、ほかにまだ何かある。何か冷りとするようなものがある。あんたのうちにあるのよ。あの「黎明」のために、人の出入りが多いことなど、あたしは何とも思つてやしません。月三回のおんなちつぽけな新聞なんか、止めてしまつたらどうかと、思わないこともないけれど、それも男の仕事のことだから、さほど気にはしないわ。また、あの女事務員にあんたが色目を使つてることもあたしは思いません。それから、貧乏なこともあたしは平気です。金があつたとて、どうせあんたは酒を飲んでしまふにきまつてるわ。そんなこと一切、あたしは何とも思わないけれど、別に、冷酷なものがあんたのうちにある。

——あたしがにこにこした顔をしていると、あんたはいい気になって、酒を飲んで酔つ払つてしまふ。あたしがちよつと不機嫌な顔をしていると……誰だつてちよつと不機嫌なこともあるものよ……するとあんたは、ぷいと席を立ててしまふ。だからわたし言つたでしょう。愛子がもし病気にでもなつたら、あんたはどうなさるかしら。きつと放つたらか

して、看病なんかして下さらないでしょう。そう言う、あなたは苦い顔をして、黙ってしまったわ。黙ってるのは、そうだという返事と同じことよ。つまりあなたには人情味がない。人間らしい温かさが無い。

——これは別なことだけれど、新聞記事のことや、映画のことや、世間の噂など、つまらない話を時々するでしょう。そんな場合、あなたは、それはこういう気持ちなんだろうと、心理的な批判はするけれど、よい人だとか、悪い人だとか、ひどい人だとか、そうした道徳的な批判は一切しないわね。その上、道徳なんか下らないことだと、口癖のように言ってるでしょう。だけど実は、一般庶民の道徳というものは、人情を元にしたものだから。そう言う、あなたはさもおかしそうに笑ったでしょう。

——あなたという人は、実に冷酷なエゴイストだわ。そういう面に触れる時、あたしはいつも冷りとします。そしてあなたからつきまとわれればまとわれるほど、なにかごまかされてるような気がするわ。あたしがほしいのは、本当の愛情、人情の流れ、心から自然に溢れ出る温かみです。

——だから、言っておきますが、愛子の温かい心が、あなたの冷酷な性格に冷されてしまふ時こそ、もうお別れです。よく考えてみて下さい。そんなぎりぎりのところまで行か

ないうちに、すぐにお別れするか、それとも、人情を身につけてみようかと努力なさるか、どちらともあんたの自由です。御返事を待ちましょう。御返事はどうですか。

愛子は正夫の注意を惹こうとするかのように、卓をことごと叩く。何度も叩く。だが正夫は、顔を伏せたまま身動きもしない。愛子のそばに、肥満した男が立ち上る。顔も太く、体も太く、手足も太く、殊に腹はでっぷりしている。その上、ひどくだぶだぶの服を着ているので、よけい肥満して見える。

酒太郎——この酒太郎に言わせると、そりや愛子の方が無理だ。何もはっきりした理由もないのに、徒らに難癖をつけるというものだ。どだい、女の言うことは、すべて主観的でいかん。俺が本当に客観的なことを言つてやろう。それなら承認出来るだろう、ね、正夫君。

正夫はちらと顔を挙げて、不思議そうに酒太郎の方を眺め、急に顔をしかめて俯向く。酒太郎は両腕を差し出し、指をすっかり開いた両の掌をちらちら動かす。

酒太郎——いつも君は丈夫で、いいなあ。だから俺は君が好きさ。酒を飲みすぎると体に障る、と言う奴もいるが、そんなことに耳を貸しちやいかん。遠慮会釈なく飲むがいいよ。

酒太郎は両手を腰にあてて、正夫をじつと見る。そのそばで、体をくねくねさしてゐる愛子こそ、酔っ払つてゐるように見える。

酒太郎——正夫君、君の酔いつぶりは甚だよろしい。世の中の者、たいてい阿呆だから、何度も繰り返して言つてきかせなければ、はつきり納得しない。そこを君はよく心得てゐるね。繰り返し繰り返し、同じことを言う。もつとも、合の手に他のことがはさまりはするが、銚子一本あける間に、同じことを四回ぐらゐは繰り返す。阿呆相手には、それに限るよ。

——ただちよつと可笑しいのは、酔っ払つて言つたことを、君があとでけろりと忘れてることだ。だから俺にも一抹の疑念が起ろうじやないか。即ち、銚子一本あける間に、同じことを四回も繰り返すのは、前に言つたという事実を忘れて、初めて言うつもりで繰り返すのか、それとも、阿呆相手だからというわけなのか、どちらなんだい。これは君の告白を俟たなければ、俺には分らない。

正夫——僕にも分らないさ。

酒太郎——ははあ、それじゃ俺に分らない筈だ。ところで、考えてみれば、酔っ払つた時のことを後でけろりと忘れるのも、いいことだ。君はずいぶん辛辣な口を利くからね。

そして思つた通り無遠慮に言つてのけるからね。相手はずぶりと突き刺されて、深い痛手を蒙る。だから、相手の方とはにかく、君自身、そのことを後々まで覚えていとすれば、これはずいぶん困つたものだ。いくら形式打破を標榜し、徳義無視を標榜しても、社会生活には多少とも一種のエチケツトが必要だから、痛手を与えた相手の前へ、のこのこ出て行きかねるといふ意味合いもあるうというものだ。少くともいくらかの気兼ねがあろうじやないか。すっかり忘れてしまえば、どうでも宜しい。酔つ払い罷り通るといふものだ。

——ところで、ちよつと注意しておくがね。後でけろりと忘れるにしても、酔つ払つたその時の君の態度にせよ言葉にせよ、少しも取り乱したところがなく、むしろ素面の時よりも立派なほどだ。だから、相手には君が酔つ払つてることがよく分らない。そういう酔い方は、ぐでんぐでんの酔い方よりも、よほど危険だぜ。とんだ誤解を招く恐れがある。用件なんかいくら忘れたつて構やしない。冗談なんかいくら飛ばしたつて構やしない。だが、相手が生真面目な女性だとか、謹厳な君子人だとかの場合には、後から弁解のしようもないことに立ち到らないとも限らない。この点は用心したがいいぜ。

——とにかく、君のは乱れない酒で、甚だ結構。口数が多くなるのも、胸中がすすきりする結果になつて、甚だ結構。見識らぬ人にでも誰にでも話しかけるのも、万人同胞の意

味で、甚だ結構。結構づくめだが、ただ一つ困るのは、金が乏しいことだ。財産があるわけではなし、雑誌や新聞に書き散らす雑文の原稿料だって高が知れたものだし、「黎明」だって購読料月三十円ではいくら収入にもなるまい。だから、「黎明」への怪しい寄附金も時には欲しくなろうというものだ。然し、どうにか生計を立てて来たのは感心。借金だってそう沢山はないだろうね。もつとも、飲み代なんてものはどこからか出て来るものさ。

——それはとにかく、この頃、どうも俺の腑に落ちないことがある。まさか君は、この俺に背を向けるつもりじゃあるまいね。というのは、酒の取り方が違って来た。二合とか、三合とか、また二合とか、三合とか、日に何度も酒屋へ電話をかけるじゃないか。酒屋でも呆れてるだろうよ。どうかすると朝っぱらから、そして晩まで続く。一日に一升以上になることも多い。そんなだったら、小刻みに取らないで、初めから一升壺を取り寄せたらいいじゃないか。いつぞや、愛子にからかわれたらう。二合とか三合とか、そう何度も電話をかけるから、電話料だって大変だ。あたしだったら、初めから一升壺を注文して、それを食卓の上でんと据える。そうすれば、きつとうまくゆく……。

——俺はその時うっかり聞き流したが、うまくゆくとは、どういう意味だったろうか。

俺だつて疑いたくならうじやないか。まさか、酒を止めようなどと、謀反気を起してるんじゃないね。俺と君とは長い間の仲だ。そして、島流しの刑に処せられて、一方は女だけの島で酒はなく、一方は酒だけの島で女の気はないが、どちらへ行くかと聞かれたら、もちろん、酒の島を選ぶと、ふだん言明してる君のことだ。まさかとは思うが、気になるね。

——二合とか三合とか小刻みに取り寄せるのは、禁酒の前提として減酒をする、という下心じやあるまいね。それから、酔つ払うと君は、たいへん怒りっぽくなった。もとは、ここにこした和やかな酒だった。そうでなくなつたのは、また飲み過ぎたと、自分自身に腹を立ててるんじゃないね。もしそうだとすると、俺にも少し考えがある。ただでは済まさないから、覚悟しておいて貰いたいものだ。正夫君、どうなんだい。酒で顔でも洗つて、きつぱり返答しないか。

正夫は顔を挙げて、じつと酒太郎を見つめ、険悪な表情をするが、思い返したように、また俯向いてしまう。

酒太郎のそばから、小さな男が立ち上る。時彦のような細そりした体だが、時彦がひどく長身なのに比べて、これはばかに背が低い。透いて見えるような服をまとい

る。

煙吉——この煙吉から見ると、みんな可笑しいや。正夫君に未練たらたらで、そして正夫君を自分のものにしようとかかっている。俺はそんなことは企らまないよ。どうせ世の中は成るようにはかならないものだ。正夫君と別れようかどうかしよう、まったく平ちゃらさ。正夫君だってそうだろう。

正夫は顔を挙げて、煙吉を不思議そうに眺め、皮肉な薄ら笑いを浮べるが、それにも拘らず、溜息をついて、また顔を伏せてしまう。その方を、煙吉はちらりちらり見やうって、腕組みをする。

煙吉——正夫君、君はずいぶん煙草が好きなようだが、吸いすぎると体に悪いよ。煙草は口臭を去るとか、空腹の助けになるとか、考えごとをまとめるとか、いろんなことが言われているが、それも適度な場合だけだ。吸い過ぎると、食欲が無くなるし、注意力が散漫になるし、記憶力が減退する。この俺が言うのだから、間違いはないよ。口臭を去るどころか、正夫君、君の口はひどく臭くなってるし、舌はざらざらに荒れてるし、歯は脂で真黒だ。少し慎しんだらどうかね。それに、ニコチンの害毒はひどいからね。

煙吉は向きを変えて、そばに突っ立つてる者たちを眺める。

煙吉——正夫君をあんな風にしたのは、お前たちのせいだよ。酒を飲んだと、やたらに煙草が吸いたくなるものだ。恋愛のことを考えてると、やたらに煙草が吸いたくなるものだ。何もせずにぼんやりしていると、やたらに煙草が吸いたくなるものだ。あまり吸い過ぎて、正夫君、見たところ、どうも健全とは言えないよ。

——そこで、どうだろう、罪滅しの意味で、正夫君に何か贈物をしようじゃないか。第一、ここにこうしてじつと突っ立つてるのは、気が利かんね。俺はじつとしてるのが嫌いだ。動き廻りたいよ。何か面白いことはないかなあ。遊びごとはないかなあ。いや、それは後のことだ。先ず正夫君への贈物だ。どうだい、賛成しないかね。いや、それ

煙吉は順々に呼びかける。相手は返事と共にこっくりこっくり二回頷く。

煙吉——酒太郎はどうだね。

酒太郎——よかろう。賛成だ。

煙吉——愛子はどうだね。

愛子——いいわ。賛成よ。

煙吉——時彦はどうだね。

時彦——よかろう。賛成だ。

煙吉——正夫君、みんなそれぞれ、君に贈物をするよ。珍らしくもなかるうが、心こめた品だから、立ち上つて、お辞儀をし、鄭重に受け取るんだよ。

奇怪な行列が始つた。煙吉を先頭にして、一同、ゆつくりと正夫の方へ進んで行く。だが正夫は、ちらと一同を見て、卓につつ伏し、両の掌で額をかかえ、息を殺したように動きもしない。その代り、円卓の正面に坐っていた議一が、立ち上つて、一同の後を見送る。

煙吉は正夫に近づき、正夫の様子を眺めて、ちよつと立ち止るが、首を振つて、また歩き出す。いつのまにどこから取り出したのか、一同はめいめい、片手に品物を持っている。そして正夫の前に、煙吉は煙草の缶を捧げる。酒太郎は酒瓶を、愛子は蜂蜜の瓶を、時彦は鉄側の時計を、順次に正夫の前に捧げる。

正夫は突つ伏したまま身じろぎもしない。それには構わず、煙吉を先頭に一同は、踊るような足取りで、正夫のまわりを、一回、二回、三回と、ぐるぐる廻つて、元の円卓の方へ戻つてゆく。

煙吉——これで、正夫君への贈物は済んだ。

愛子——こんどはあたしたちも、少し御馳走になりたいものね。

酒太郎——そうだ、こちらも酒盛をしよう。

酒太郎が酒瓶を出すと、一同はそれぞれ、正夫に与えたのと同じ品物を取り出す。

酒太郎——おい時彦、時計なんか仕様がないうじやねえか。もつと景気のいいものを出せよ。

時彦はにつこり笑って、時計を両の掌に包みこみ、その掌を開くと、まるで奇術のようになり、時計は沢山の小さな丸い玉になっていた。半透明の丸玉で、恰も真珠のようだ。それを彼は、卓上にぎーとあける。

時彦——食べてみる、うまいから。その代り、断っておくが、これを食べると、なかなか眠られなくなる。それでもいいか。

酒太郎——いいとも、どうせ夜明しだ。

一同は真珠めいた菓子に手を出し、かじってみる。うまいうまい、という歓声。そして酒を飲み始める。酒太郎はなお、酒の小瓶を幾つも出して、皆に勧める。一同ラツパ飲みをする。

問。

次第に酔いが廻ってくる。手当り次第に、酒を飲み、煙草をふかし、真珠菓子をかじ

り、蜂蜜まで嘗める。——その乱雑な光景を、議一は少しわきの方に突っ立つたまま、茫然と眺めている。

愛子——あんた、そんなところに突っ立つたきりで、どうしたのよ。ばかみたい。こつちに来て、仲間にはいりなさいよ。構わないわよ。

議一はおずおず近寄って、酒盛の仲間にはいる。そして彼一人だけ、椅子に腰を下す。煙吉——少し動きたくなつた。歌でもうたいたくなつた。お前たちはどうだい。

時彦——よしきた。元気にいこう。

時彦が音頭を取つて、ラ・マルセイエーズを歌い出し、一同それに和して歌いながら卓を叩いて拍子を取る。議一ひとり黙っている。

愛子——あんた、なぜ歌わないの。

議一——僕は、そんなバター臭い歌は知らないんだよ。

愛子——まあ、フランスの国歌じゃないの。そんなら、何を知ってるの。

議一——そうさなあ。ノーエ節ぐらいなもんかな。

愛子——ノーエ節……。ああ、富士の白雪というあれでしょう。

酒太郎——宜しい、こんどはあれにしよう。ぐるぐる廻って、際限なく歌える。この円

卓みたいなもんだ。

一同はノー工節を歌いながら、円卓のまわりを踊るように歩き始める。歌は終りからまた初めへと連続し、彼等は円卓のまわりを何回も廻る。——ただ議一だけ、腰掛けのままでいる。

ふと、時彦は議一の側に立ち止って、その顔を覗き込む。

時彦——やあ、これは不思議だ、俺のあの菓子を食べたのに、この男は居眠りをしてい
る。眠られる筈はないんだがなあ。

皆そこに集まってくる。

煙吉——眠られなくなるって、本当かね。

時彦——俺は嘘は言わない。

煙吉——それじゃあ此奴、狸寝入りか。

煙吉は議一の背中を殴る。他の者も一緒になって殴る。議一は眼を覚して、あたりを見廻す。

煙吉——お前、ほんとに眠ってたのか。

議一——自分自身がどっかへ、すーっと消し飛んでゆくような気持ちだった。そして夢

を見た。

煙吉——どんな夢だ。

議一——河の深い淵だった。上手の方は、浅い瀬で、きれいな水がさらさらと流れていた。その水が流れ下って、深い淵になっている。心のうちで、その淵を見つめていると、淵はだんだん深くなる。底知れず深くなる。そして水は濁り黒ずんで、澱みきっている。底の方がどうなっているか、見当もつかない。たぶん空気も通っていないんだろう。水は腐ってるんだろう。魚も寄りつかないらしい。そうした深い淵が、ずっと下流まで続いていた。淵の一方は高い急な崖で、僕はその崖の上にあった。崖から淵の方を覗き込むと、恐ろしい力で吸い込まれるようだった。否応なく、運命的に、僕は淵に落ち込むことになっていた。僕は一生懸命に抵抗した。崖縁にしがみついた。だが、ずるずる滑り落ちてゆく。どうにもならない。そら、もうすぐ淵だ。上からは石ころが落ちてくる。どんどん落ちて来て、背中当たる。もう駄目だと思った。そして眼が覚めたんだ。

煙吉——ほほう、そんな夢か。それじゃあお前は、俺たちに感謝していいよ。俺たちのお陰で、お前は淵に落ち込まなかつたんだからな。

議一——夢の中のことだよ。

煙吉——夢にしてもさ。俺たちがお前を叩き起してやったんだ。

議一——斃されてでもいたのかい。まったく、あの深い淵はいやだった。胸がむかつくようだ。

酒太郎——夢の話なんか止せよ。胸がむかつくようなら、もつと酒でも飲め。

愛子——この真珠菓子を食べたのが、いけなかったんじゃないの。

時彦——ばか言うな。これを食べたくせに居眠りなんかするから、いけないんだ。然し、この男はちよつと變つてるな。夢の話も捨てたもんじゃない。ちつとばかり、気骨を持つてるようだ。

酒太郎——なあに、気骨もくそもあるものか。さあ、飲め飲め。

議一はぼんやり酒瓶を取り上げる。一同も再び飲み食い始める。席は乱雑になる。
問。

不思議なことが起つた。議一を除いて、他の者たちは、後ろから髪の毛でも引つ張られるかのように、時々、手を挙げて後頭部を打ち払う仕種をし、振り向きもする。

酒太郎——誰だ、俺の髪の毛を引つ張るのは。

煙吉——誰だ、髪の毛を引つ張るのは。

愛子——だめよ、髪の毛なんか引つ張つちやあ。

時彦——いたずらは止せよ。

その都度、互に顔を見合せて、怪訝な面持ちになる。

時彦——どうもおかしいぞ。俺たちは誰も、ひとの髪の毛なんか引つ張つてはいないね。そして誰からか引つ張られてる。振り向いても誰もいない。然し引つ張られてることは確かだ。これは、酔つ払つたせいじゃない。何かある。奇怪極まる。

愛子——なんでしようね。あたしなんだか怖くなつちやつた。

酒太郎——なあに、こんどやつたら、俺が引つ捕えてみせる。

煙吉——世の中には理外の理ということもある。お化じゃないか。お化だったら面白いぞ。お化、出て来い。

何かの気配を感じて、警戒するかのように、一同は一つ所に寄り集まる。

一同の正面、つまり正夫を背後にして円卓の一端に、ぼんやりと人影が現われる。白髪の老女で、薄鼠色の和服を着ているが、全体がぼやけて形体は定かでない。——このあたりから、正夫は顔を挙げて、やはり卓上に頬杖をついているが、眼は伏せず、一同の方をぼんやり眺めている。

老女——お前さんたちの髪の毛を引っ張ったのは、このわたしだよ。なあに、ちよつとした悪戯さ。気味わるがらなくてもいいよ。悪意はないんだからね。

——お前さんたちには、古い馴染みだ。わたしの夫、正夫の父がね、やはり正夫のようだった。いえ、正夫が父に似たんだらうよ。父の方はたいへんな酒好きで、とても正夫どころではなかった。毎日朝酒を飲んで、昼酒を飲んで、そしてまた寝酒を飲んだものさ。もつとも、それは亡くなる前のことだがね。煙草は始終口から離さなかったよ。若い時から女道楽で、老いてますます盛んな方だった。どこやらに、落し胤も幾人かある筈だ。そんなだから、したがって懶け者で、まとまった仕事をしたこともなく、ぶらぶら遊んでばかりいたよ。そして肝臓と腎臓とを悪くして、亡くなってしまった。

——そんな男だけれど、ただ一つ取り柄があった。物にこだわらないことだよ。恬淡というか、無頓着というか、一つのものに執着することがなかった。酒を飲んでも酒に呑まれることはなかった。煙草をいくら吸っても、煙草に吸い込まれることはなかった。女好きではあったが、女に丸めこまれることはなかった。その点を、わたしから見れば偉いと思うよ。何事も、心から執着しなければ本当のことは分らない、と言われてるけれど、また逆に、執着したために分らなくなることも、しばしばあるからね。

——そこへゆくと、この節の男たちは、みみちくなくなったものだ。何にでもすぐに溺れ込んでしまうからね。酒に溺れる、煙草に溺れる、女に溺れる、仕事に溺れる……。溺れないものがあるかね。溺れたらもう駄目だよ。水に溺れた者が水から逼り出して来たためしがあるかね。水から出るのは、もう死体になってからだ。

——だから、お前さんたちも用心するがいいよ。うっかりすると、とんだ殺人罪を犯すことになる。なにしろ相手が相手だ。何にでも溺れたがつてるものね。泳ぎを知らない者が、早魃だからつて、深い淵に飛び込むような真似を、すぐにしたがるからね。

——それに、お前さんたちの方にも、罪があるよ。みんな慾が深くなってきた。つかまえたらもう放さないという慾心さ。さもしいものだ。きつとお前さんたち、昔と違つて、貧乏になつたんだらうね。貧すれば貪するさ。でも、自分の分限を知らなければいけないよ。のさばるのはまあよいが、慾張つてはいけけない。注意しておくがね、あまり慾張ると、元も子も無くしてしまうよ。分つたかね、分つたらそれでいいさ。

老女の姿、搔き消すように消えてしまう。一同はほつとしたように、酒を飲みだす。

暫く無言。

酒太郎——忌々しい婆だ。

煙吉——俺たちに意見をしていきやがった。

愛子——あのひとに髪の毛を引つ張られたかと思うと、頭中がむずむずしてくる。

時彦——然し、みごとにやつつけられたね。

煙吉——誰がさ。

時彦——俺たちみんなだ。

煙吉——いや、俺はやっつけられたとは思わん。

愛子——あたしもそうは思わんよ。時代が違つて、物の考え方が違つただけのことさ。

酒太郎——だが、俺たち、貧乏になつたんだらう、には参つたね。まったく、下落したんだからね。

煙吉——下落したつて構わん。何もかもがそうじゃないか。

一同は何かやがや言いながら、自暴自棄のように飲み食いする。その光景は、ますます乱雑になる。

不思議なことに、室内にいるのはどうも彼等だけではないような感じだった。私（筆者）は初めからそういう印象を受けていた。眼に見えるのは彼等だけだが、まだ他にいろいろな人物がどこかに潜んでいる、そういう気配だった。もとより、それらの者

は、姿を現わしもせず、口を利きもしなかったが、確かにその室内にいるに違いなかった。実体の分らないそれらの者のため、室内の雰囲気はへんに乱されて、落着かない不安なものになっていた。だから、老女の姿が現われたり消えたりしても、私にはさほど意外ではなかった。眼に見える者たちの饗宴にしても、影の人物がたくさん参加してゐるような感じだった。然しそれら影の人物が、なかなか姿を現わさないのは、私の甚だ遺憾とするところである。

一人黙っていた議一が、ふと、こちらを向いて顔を挙げてゐる正夫に気付き、その方を凝視し、そして立ち上る。

議一——正夫君、さつきのお婆さんは、ほんとに君のお母さんかね。本人はどのように言っていたが……。

正夫は頼杖をついたまま、もう顔を伏せず、不敵な笑みを浮べる。

正夫——さあどうだか、よくは分らない。

議一——なんだつて。君は母親をも見分けられないようになったのか。

正夫——そつちを向いていたから、後ろ姿だけでははつきり分らなかった。

議一——そんなら立つて来るなり、言葉をかけるなりして、確かめたらいいじゃないか。

正夫——その興味もなかった。

議一——興味の問題じゃない。心情の問題だ。

正夫——僕にとつては、今のところ、自分一人のことで一杯だ。然し、あのひとが言ったことは、なかなか参考になった。或は、僕になにか教えるつもりで言ったのかも知れない。ただ、世代の違いから来る不理解な点があるのは、止むを得ないだろう。

議一——どういう点が不理解なんだ。

正夫——解決の方法が違う。

議一——何の解決なんだ。

正夫——それはいずれ見せてやるよ。

愛子——あら、正夫さんが話をしてるわ。

一同は正夫の方を見る。——おかしなことに、彼等は最初立ち上った時からずっと立ち続けてるのだ。

酒太郎——ほう、悪びれずにこつちを見てるね。その通り、元気を出すんだ。そして、まあ酒でも飲めよ。俺たちはもうずいぶん酔っ払った。さつき、君のお母さんとかいうひとから、だいぶ意見をされたが、君も聞いたろう。面白いことを言うひとだ。酒に溺れる、

煙草に溺れる、女に溺れる、仕事に溺れる、それが現代の通弊だつてき。通弊というものは、然し、時代思潮みたいなもので、一通りは身につけておくべきものだ。だから、溺れて構わん。どうだ、こつちに来ないか。それとも、俺たちの方で押しかけて行こうか。

議一——おい、君たち、もつと静かにしてくれ。正夫君は初めから、もう暫く放つといて貰いたいと、僕に頼んだ。その通りにしておいてやろうじゃないか。

煙吉——だから、俺たちは、静かに贈物を捧げたんだ。よけいな干渉はしないよ。

時彦——それも、時によりけりだ。どうも、正夫君を一人きりにしておきたくないね。
愛子——そうよ、そうよ。あたし行つて、連れて来よう。

煙吉——まあ待て。

正夫は卓上にある品々を眺める。酒瓶を取つて、ぐつと飲む。蜂蜜の瓶を取つて、口一杯嘗める。再び酒をぐつと飲む。時計を取り上げて、時刻を見る。それから、缶の煙草を一本取つて、悠々と吹かす。——その一々の動作を、一同は見守る。

正夫——僕がここでやつてることが、どういう意味だか、君たちに分るか。お別れの挨拶だぞ。もうたくさんだ、きつぱり別れよう。だが、僕は卑怯に逃げ隠れするのではない。僕にも多少の意地と体面とがある。そして君たちに思い知らせてやりたいんだ。そうだ、

思い知らせてやる、こいつは素晴らしいことだ。見ておれ、思い知らせてやるから。

正夫は卓上の品々、酒瓶と蜜瓶と煙草缶と時計を、一つずつ取り上げ、窓へ投げつける。窓硝子の壊れる音がして、品々は外の闇の中に消える。——硝子の碎け散った窓が、ぽつかり口を開いている。正夫は一瞬、身を翻えすと、駆け出して行って、窓の穴から外へ飛び出してしまふ。

議一——あ、いけない。しまった。

議一は窓へ駆けつける。一同も駆けつける。他の窓も開けて、外を透し見る。

議一——ここは四階だ。無事に飛び降りられるものではない。体は粉微塵だ。行ってやろう。

一同は足をめぐらして、窓と反対側にある扉を開き、廊下へ出て行く。

その時私（筆者）は、彼等の足音ばかりでなく、他のざわめきをも、確かに聞いた。眼に見える彼等ばかりでなく、他に多くの者が室内にいたに違いない。そして正夫は、それら多くの者の前に、曝しものとなっていたのである。それを思つて、私はぞつとした。だが、一人残らず皆が出て行った後、室内はしんしんと静まり返り、更に深く静まり返つてゆくのが、耳にも感じ肌にも感じられて、何とも言えない恐ろしい思

いだった。開け放されたままの窓から、開け放されたままの扉へと、冷たい夜気が流れていった。ふと見廻すと、円卓の上の饗宴の品々は、奇蹟のように消え失せていた。どうなったのであろうか。まさか彼等は魔法使ではなかつたろうが、不思議極まる事態だった。考えてる時、また奇怪にも、天井の電灯がふつと消えた。室内は闇にとぎされた。

寸時の躊躇の後、私は手探り足探りで、窓の方へ近づいて行つた。窓口が、仄かな明るみで浮き出していた。窓から身を乗り出して覗いてみたが、戸外には深々と闇が湛えているきりだった。樹木も見えず、他の建物も見えなかった。窓の下方の地面も見えず、何一つ見えず、燈火も見えず、人声どころか、物音一つ聞えなかった。正夫や、其他の者たちは、どうなったのであろうか。忽然と消え失せたと思えなかった。私は夢をみたのであろうか。茫然とそこに佇むばかりだった。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第五卷（小説5 [#「5」はローマ数字、1-13-25]・戯曲）」
未来社

1966（昭和41）年11月15日第1刷発行

初出：「群像」

1952（昭和27）年7月

※底本では「時彦——どうもおかしいぞ。く奇怪極まる。」の段落だけ「改行天付き、折り返して1字下げ」になっています。

入力：tatsuki

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年12月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

囚われ人

—— 寓話 ——

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 豊島与志雄

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>